Ｍｉｓｓｉｎｇ

稼頭矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｉｓｓｉｎｇ

【Ｎコード】
Ｎ００２０Ａ

【作者名】
稼頭矢

【あらすじ】
コナンがいなくなって一週間後、蘭の元に新一から電話が…それは、「俺のことは忘れてくれ」というショッキングな電話だった。

第一話：別れ

私は眠れない夜をすごしていた。無駄だろうとは思いつつもとりあえず布団に入ったものの、やっぱり寝ることが出来なかった。代わりに、と言うわけじゃないけれど、寝ようとする心とは裏腹に無意識のうちに色々な事が頭に浮んできて、いつの間にか涙を流していた。

私は寝ることを諦めて布団から出た。傍においてあったカーディガンを羽織ると自分の部屋の窓を開けた。テレビでは今年は暖冬と言っていたがさすがに12月だ。真夜中になると寒くないはずも無く、部屋には冷たい風が吹き込んできた。私は少し身震いしながら夜空を見上げた。空はドンヨリと曇っている。

「バイバイ、蘭姉ちゃん・・・」

一週間前のコナン君の声が今でも耳見に響いている。それと同時に今
までの思い出が頭の中を一気に駆け抜ける。

本当に突然の事だった。一週間前の昼過ぎ、コナン君のお母さん・・・
文代さんがやって来てコナン君を引き取っていった。あまりにも突然の事で私もお父さんも驚いた。勿論、いつかはこの日が来ると思ってたし、子供は両親の下で暮らすのが一番だというのもわかっている。それでもやっぱり、結構な間一緒に暮らしていたのだから別

れは辛かった。
だからといって、私にはそれを止めることは出来ないし止める権利も無いのだけれど・・・。
お父さんも何だかんだ言いながら結構ショックだったようだ。もしかしたら最近はコナン君を本当の息子のように思っていたのかもしれない。

その後、私は一人、自分の部屋にこもると、ずっと一人で泣いていた、そして今も無意識のうちに涙を流している・・・。
気付かなかった。私の中でコナン君の存在がこれ程までに大きくなっていたなんて。勿論、恋愛感情とかそういった類のものではないけれど、コナン君が居た事で安心していられた。コナン君のそういうところはどこか新一に似ていた。もしかしたら私は新一の居ない寂しさをコナン君で紛わせていたのかもしれない。

バカね、私って・・・。どうして新一の時もコナン君のときも居なくなって初めて気づくんだろう?存在の大きさに・・・。

不意に外が騒がしくなった。下を見ると酔っ払いと思しきサラリーマン風の男が2・3人大声を挙げながら歩いていた。酔っ払って呂律が回らなくなっているのか、何を言っているのかは分からない。普段なら近所迷惑もいいところだけど、今の私のはどうでもよかった。

「いっそのこと、私もあれくらい馬鹿になれたらいいのに・・・。
何もかも忘れて・・・」

私は誰に聞かせるでもなく独り言を言った。

それから暫くの間、ボンヤリと外を眺めていたけれど、さすがに体が冷えてきた、というか冷え切ってしまったので、窓を閉めた。

こんな時に考えてしまうのはやっぱりアイツのこと・・・ホントに悔しい。どうしていつもアイツのことばかり考えてしまうのだろう・・・。自分でもバカだと思う。

先程の酔っ払いが通った後、再び夜の静寂が訪れていたが突然その静寂を打ち破るかのように無機質な電子音がした。正確に言えば携帯電話の着信音だ。

ディスプレイには「非通知設定」。

（新一だ・・・）

理由は分からない、確証も無い。ただ私は何故かそう思った。いや、

そうであって欲しいと思っていただけかもしれない。私は少し震える手で通話ボタンを押した。

「もしもし・・・」

「蘭か・・・」

聞こえてきた声は、今一番聞きたかった声。

「新一・・・？」

「泣いてるのか？」

「バ、バカ、何言ってんのよ。何で私が泣かなきゃいけないのよ！」

嘘だ。泣いていないなんて嘘だ。ついさっきまでまでも泣いていたし、今だって新一の声を聞いて溢れ出しそうになる涙を抑えるので精一杯だ。新一には、素直で、本音で接したいといつも思っているのにどうしても素直になれない自分がいて。

「んな涙声で言っても説得力ねーぞ？」

「だって・・・だって・・・」

ああ、もう限界。私は涙を抑えるのを諦めた。

「あのボウズが居なくなったからか？博士から聞いたよ・・・」

本当に貴方は名探偵ね。何もかもお見通しで。

「うん・・・いきなりだったからさ・・・ちょっとショックで・・・」

「そうか・・・」

でも新一に話したら、新一の声が聞けたから、少しだけそのショックも和らいだかもしれない。本当に悔しい。いつもいつも新一に救われてばっかりで・・・。でも、今日はそれに甘えたかった。新一の声が聞きたくて、この電話が切れるのが嫌で、私はただ他愛も無い話を続けた。新一は適当に相槌を打っていたけど、途中で電話の向こうの何か新一の様子が可笑しい事に気がついた。相槌を打ってはいるけれど、殆ど話に乗ってこないし、どこか上の空というよりも耳に入っていないような感じだった。それでも私はそれほど深刻に考えていなかった。新一の事だから小説片手に電話しているのかもしれない

「ちょっと新一？ちゃんと話し聞いてる？」

私は少しドスを聞かせて言ってみた。

「なあ蘭・・・」

「何よ?」

「もう俺のこと忘れてくれねーかな?」

目の前が真っ暗になったような気がした。

「何・・・言ってるの?・・・新一・・・」

「聞こえなかったのかよ?もう俺のことは忘れろって言ったんだよ」

「どうして・・・」

「・・・」

新一は何も答えなかった。俺のことを忘れろ?どういう事?

「冗談だよね・・・新一・・・」

すがるような思いだった。「冗談だ」って新一の口から言って欲しかった。これが夢ならばとさえ思った。けれでも現実は、酷く冷たく、残酷で。

「んなこと冗談で言うわけねーだろ・・・」

「待ってろって・・・」

もう、言葉にさえなっていなかったかもしれない。それでも私は何とか振り絞るように声を出した。

「待ってろっていったじゃない・・・」

「ごめん・・・」

謝らないで。私はそんな言葉が聞きたいんじゃない。どうして？どうして何も言ってくれないの？もしどうしてもっていうんなら理由くらい言ってくれてもいいじゃない。ワケワカンナイよ新一・・・。

あの約束は何だったの？私って貴方にとってそんなにどうでもいい存在だった？こんな機械越しの会話で終わらせることが出来るくらい軽いものだったの？どうして会ってちゃんと説明してくれないの？

私は、本当に貴方の事が好きなのに、愛しているのに・・・。

今電話から聞こえてくるのは機械的で不愉快な音。それは既に、もう新一との電話が繋がっていない事を意味した。同時に新一との関係も終わってしまったのかもしれない。そう思うともう枯れてしまうんじゃないかと思うほどの涙を流しながら、私は夜が明けるまで呆然と立ち尽くしていた。

第一話：別れ（後書き）

作者より

というわけで連載中のほうが詰まってしまったので気分転換に初めてしまいました（汗）

気分転換でこの暗さかよ！って感じですが・・・

しかもタイトルのネーミングセンス０やし・・・

あまり気にせずに適当に流してやってください（汗）

第二話：消えた名探偵

新一（コナン）が「黒の組織」と言っていた地下組織が壊滅してから既に半年以上が経っていた。

組織の犯行は世界的に行われていたうえに、その組織の本部が日本にあったという事で、組織の存在が明るみになった時は、マスコミは挙ってこの組織のことを扱った。

こういった大事件があるとよくある事だが、各メディアは少しでも視聴率や販売部数を稼ぐために躍起になり、それによって報道合戦がヒートアップし、噂や憶測やガセネタが数多く飛び交ったようだ。ニュースやワイドショーはまだましだった。週刊誌の中にはおよそあり得ない事を載せているものまであった。

そんな世間に流れた噂の中一つにこんなこんなものがあった。

「この組織の壊滅作戦に工藤新一が参加していたらしい」

そして彼が暫く表舞台（探偵に表舞台というのも妙だと思うが）に出てこなかったのは密かにこの組織を追っていたからしい。というものだった。しかし所詮は「噂」である。誰が言い始めたのかなんて分からないし、それが確かなものである証拠も何一つ

としてない。噂とはそういうものだ。

しかし、蘭にはこの噂を噂として聞き流す事は出来なかった。蘭がこの噂を聞いたのは新一から突然の別れを告げられてからそんなに経っていない頃だったから、正直、複雑な気分だった。一番聞きたい名前でもあると同時に、一番聞きたくない名前でもあった。それでも蘭はこの話しが本当であるのか、やはり唯の噂であるのか、確かめずにはいられなかった。もし本当だったとしたならば、新一が言っていた「事件」は終わったはずだし、きっと戻ってくるだろうと思ったのだ。そして如何しても聞きたかったのだ。

「もう俺のこと忘れてくれねーかな?」

新一は何故あの時あんな事を?

とりあえず蘭はどうせ教えてもらえないだろうと思いながらも警察に問い合わせてみた。しかしドライな口調で

「そのような事実は無い」

と言われた。

別にこれに関しては蘭はそれ程落胆しなかった。むしろ当然だとも思う。もし本当に新一が無関係であるならば嘘は言っていないわけだし、仮に新一が関わっていたとしても相手にしてみれば「得体の知れない」人間にそう易々と教えるわけにもいかないだ

ろう。もしかしたらそう言って問い合わせた人間がその組織の残党で関わった人間に報復しようとしているかもしれないのだ。そう考えると警察側の対応はむしろ正しいものであるといえるかもしれない。

次に蘭は「もしかしたら何か知っているかもしれない」と思い西の名探偵・服部平次に連絡してみた。新一と個人的な交友もあるようだったし、何よりも新一と肩を並べるほどの名探偵なのだ。もしかしたら平次もあの組織の事を知っていて、密かに追っていたかもしれない。そう思って平次に聞いてみることにしたのだ。平次は暫く黙っていたが

「噂は、ホンマや・・・」

と言っただけだった。ただ蘭にとってはそれで十分だった。噂が真実であった。そうであれば前述のように新一が近いうちに帰ってくるだろうと思ったからだ。

しかし・・・

組織壊滅のニュースから一ヶ月が過ぎても新一が姿を現すことは無かった。それどころか新一に関してもう一つ、良くない噂が流れ出した。

「工藤新一は組織との闘いで死んだ」

自分でも勝手なものだと思うが蘭はこの話は信じたくなかった。もし本当に新一が死んだのであれば、もう会うことが出来ない。新一に一方的に別れを告げられたとはいえ、今でも蘭は新一を愛しているのだ。人の死という重大な事を簡単に憶測する事に憤りを感じる前に、私情を優先した自分に蘭はいくらかのショックを受けたが、そんなことよりも新一に生きていて欲しかった。

やがて桜が散る頃になるとアレだけ盛大に報道されていた組織のニュースも流石に沈静化していった。無理も無い。悲しい事に今に日本は一つの組織が無くなったからといって凶悪犯罪が減るような国ではない。それどころか年々増加の一途を辿っている。言い方は悪いがわざわざ組織に頼らなくても人々が飛び付くニュースはいくらでもあるのだ。

人の噂もなんとやら・・・。その頃になると新一に関する噂も沈静化していた。興味がなくなったといったほうがいいかもしれない。無理も無い。良くも悪くも忘れられる事の早い昨今の世の中で何ヶ月も姿を現していない人間を覚えておけと言うことのほうが難しい事だろう。

今もしも、「工藤新一死亡」のニュースが流れたところで、一体どれだけの人間が関心を示すだろうか?むしろ世間では死んだ事に「なっている」かもしれない。

それでも蘭は新一が生きていると信じようと思った。新一に何を言われたかなんて関係ない。自分でも意味の無い事かもしれないと思うし、馬鹿げているとも思うがそう決めたのだ。

しかしそんな蘭をあざ笑うかのように時間だけが過ぎていった。

気がつけば季節は夏になっていた。

第二話：消えた名探偵（後書き）

作者より

と、いうわけで第二話なんですが・・・短い上に同じ言葉を連呼したためにかなり面白くないですね・・・・

消えた名探偵って大袈裟すぎやし・・・

次回から気をつけます

第三話：大阪からの来訪者

和葉は蘭に会うために東京に向かっていた。

去年の冬に蘭と新一の間に、何があったかは蘭から電話で聞いていた。自分の親友のことだし、蘭の新一に対する気持ちも知っていたので、和葉はショックを受けるとともに、新一に対して怒りを覚えた。あまりに自分勝手ではないか。それも直接会って、理由を言った上でならまだ仕方がないが何の説明もしないで、というのはふざけているにも程がある。しかもあれ以来、姿を見せることはおろか、連絡すらしてこないと言う。

以前、和葉が電話をした時、蘭は言った。

「新一が言っていた事件は終わったみたいだから、もうすぐ帰ってくると思う。帰ってきたら私にあんなことを言った理由が聞きたい。だから新一が帰るのを待っていたい」

和葉は正直、

「蘭ちゃんも蘭ちゃんや、あんな薄情なやつさっさと忘れてまえばええのに」

と思わなくもなかったが、そんなことを面と向かって言えるわけはないし、蘭がそういうことが出来る性格でもなく、何よりも自分が蘭の立場だったら、平次が「自分のことを忘れろ」と言って消えてしまったら・・・あっさりと忘れる事が出来るだろうか？そう思うとそんな考えはどこかに消えてしまった。そして今でも工藤新一という人間が蘭の心を支配していると言う事も分かって

いた。

そうであるからこそ、和葉は新一に対して余計に怒りを感じていたのだ。この頃、和葉の中では新一は和葉がこれまでに出会ってきた人間の中でも最低ランクに評価されていた。・・・無理もないことかもしれないが。

ただ、最近はそれが微妙に変化していた。春ごろには「工藤新一死亡」の噂が流れた。
絶対に言わなかったが心のどこかで新一はやはり死んでしまったのではないかと思う自分もいたのだ。勿論新一に対する怒りの感情は収まっていないが・・・

和葉は今蘭が新一の事をどう思っているか知っているからこそそんな蘭を心配してこうして足を運んでいるのだ。勿論いらぬお節介だと言うのはよく分かっていたが、和葉が前回彼女に会った時、酷く疲れた様子だった。それを見ると如何しても放っておけなかった。和葉とはそういう性格なのだろう。

東京駅に着き新幹線を降りると、先程までの涼しく、快適だった空気とは正反対の、蒸し暑く、不快な空気が体に絡みつくように流れてきた。

「暑・・・」

和葉は小さく呟くとホームを降りた。

改札口の外には蘭が迎えに来ていた。蘭は和葉に気がついたらしく軽く手を挙げて

「こっちこっち」

と言っているようだった。

何ヶ月ぶりか似合った蘭は前よりも疲れているようだった。ころなしか少しやつれているようにも見える。自分のことを笑顔で迎えてくれてはいるが、無理をしているというのはすぐに分かった。和葉はそんな蘭を見るのがやはり辛かった。勿論一番辛いのは蘭本人なのだろうが・・・。

「久し振り、和葉ちゃん」

蘭はあくまで笑顔で言う。

「うん、久し振りやねえ、蘭ちゃん」

「ごめんなー、平次も連れて来よ思てんけど、『外せへん用事があるから』って」

そう、最近、東京に来るのは和葉ひとりになった。尤も、和葉は毎回「蘭ちゃんの様子を見に行こう」と誘っていたのだが平次はほとんどの場合「スマン、その日ははずせへん用事があんねん」と言って断っていたのだ。その用事が何であるかは教えてくれなかったが・・・。

「そんな、いいよ別に、服部君だって忙しいんだし・・・」

蘭はやはり、あくまで笑顔で言う。

立ち話も何なので・・・という事で二人は取りあえず近くの喫茶店に入ることにした。

「ほんまに工藤君何所で何してんねやろ?蘭ちゃんにこんな思いさせて、平次もそやけどそんなに事件が面白いんやろか?」

席についてコーヒーを注文すると和葉が不満を言った。できるだけ明るく言ってみた・・・つもりである。

「仕方ないよ・・・新一から推理取ったら何にも残らないんだし・・・」

そう笑顔で言った蘭は和葉にはとても辛そうに見えた。

「せやけどもう半年以上電話すらないんやろ?」

「うん・・・私ね・・・最近思うんだ。私ってバカだなーって」

「蘭ちゃん?」

「いっそのこと、新一に言われたとおり、新一の事なんか全部忘れちゃったら楽になれるのに、どうしても忘れる事が出来ない・・・

ううん、それどころか・・・あの日以来新一の事を忘れた事なんてただの一度もなかった・・・」

それが彼女の本音なのだろう。蘭は自分の表情が暗くなっていた事に気がついたかのかどうかは分からないが、最後に

「ね？バカでしょ？私を振った男の事を考えてるなんて」

と言って笑った。

「ほんまに工藤君は何考えてるんや、蘭ちゃんにこんなに想われとんのに、ウチ、もし工藤君の顔見たら1発どついたらな気ィすまへんわ」

和葉は知らないうちに大きな声になっていた。

「べ、別に和葉ちゃんがそこまで考えなくても・・・」

蘭は思わず苦笑いながら言った。

「いや、笑い事とちゃうで、蘭ちゃん。もし工藤君が戻ってきて調子エエ事言うてもあっさり許したらアカンで。歯の2．3本くらい折ってもかまへんから思い切りどついて暫く色々とこき使ってもまだ足らへんくらいや！」

・・・もうエライ言われようである。しかも新一が自分の持ち物であるかのような言い方である。

和葉は店内中に響き渡る、それもとても冗談で言ってるとは思えないくらい、そして見た目からは想像も出来ないほどドスの利いた声でいったので「なんだ、なんだ」と店内にいた人々がが蘭

と和葉の机に注目した。

さすがに和葉は恥ずかしくなって店を出るまでおとなしくしていた。

それから数時間が経った。和葉が自分の腕時計を見ると5時を指していた。

「あ、もうこんな時間や・・・ゴメンな蘭ちゃん、そろそろ帰らんと・・・」

和葉は蘭に申し訳なさそうに言った。

「ううん、ありがとう、あ、東京駅まで送ってくよ」

夏場の5時と言えばまだまだ陽は高いが、何分和葉は大阪から来ているのである。東京に泊まるのであれば問題ないのだが、どうやら親からその日のうちに帰って来いと言われたようである。和葉と蘭は現在高校三年生。これから大学受験を迎えるので親からしてみればあまり遊ばれるのもいい気分はしないだろう。蘭にも迷惑が掛かるから、というのもあったかもしれない。

「ええよ、蘭ちゃん、ここで、ここからの方が家に近いんやろ?」

「うん、じゃあ・・・またね・・・」

そう言って二人は別れた。

（和葉ちゃんってすごいな・・・。どうして私の為にこんなに親身になって新一の事であんなに熱くなれるんだろう・・・。もし私と和葉ちゃんの立場が逆だったら・・・、たびたび大阪に足を運んだり、「服部君を1発殴らないと気がすまない」とか、私にそんなことが言えるかな・・・？）

蘭は一人、そんなことを考えていた。

第三話：大阪からの来訪者（後書き）

作者の言い訳

和葉「話進んでへんやん」

作者「すいません」

新一「それにしても俺酷い言われようだな」

和葉「蘭ちゃんにあんなこと言うたんやから当然や！」

新一「俺が言ったんじゃねー！この無能な作者がっ、てあれ？」

（作者逃走済み）

新一「あーあ逃げやがった」

和葉「しゃあないなあ・・・ＣＮＲ一のダメ作者の駄文を読んで下さった皆さんありがとうございました」

お粗末ですいません・・・

いつまでも新一消えたままでも仕方がないので次辺りから徐々に明かしていきたいと思います。

第四話：失踪の真実

私は夕食を食べた後「最終的な確認をしておきたい」、と言って一人地下室に篭っていた。私と工藤君の体は既にこの前やっとの思いで完成させた解毒剤によって元の姿に戻っている。

先日、ようやく組織の本拠地と思われる場所を発見した。明日そこに乗り込むことになっている。私は反対だったけど・・・。

組織の規模が実際の所どれくらいなのか、私にも分からない。私が思っている以上に巨大なものかもしれないし、本当は極小さな組織なのかもしれない。ＦＢＩですら全貌を掴みきれずにいる状況だ。それに下手に踏み込んでは返り討ちになるだけかもしれない。それ程危険な賭けなのだ。ところがその話をした時、工藤君は信じられない事を言ってきた。

・・・・・・

「じゃあ俺がまず一人で乗り込んで、組織のデータを全て捜査本部のＰＣに転送する。そのデータを基に一気にぶっつぶせばいいんじゃねーか？」

工藤君の言葉を聞いてその場にいた誰もが耳を疑った。

「工藤君、私の話聞いてなかったの？危険すぎるわよ！」

私は思わず怒鳴っていた。他の人達も口には出さなかったけど、「君は一体何を考えているんだ」といった表情をしていた。

本当にこの人は何を聞いていたんだろう?と思った。大人数でも危ないのに一人で乗り込むなんてはっきり言って「殺してください」と言っているようなものだ。

「だって、それしかねーじゃん」

工藤君は事も無げにケロリと言った。まるで、自分の行動を頭に描いて、その危機的状況を楽しんでいるかのように。

「でも組織の実態が分かってりゃ何とかなるかもしれねーんだろ?だったらバカみたいに最初から大人数で行って返り討ちに合うより俺一人だけが犠牲になったほうがマシだろ?」

工藤君は笑みさえ浮かべて言う。そうか・・・この人は、最初から死を覚悟しているのかもしれない。そういう性格だというのは東京中を巻き込んだ爆弾事件の時になんとなく分かってはいた。沢山の人の、悪い言い方をすれば見ず知らずの人の、命を救うためならば自分の命の危険も顧みない。誰も言葉が出なかった。きっと理解したのだ。もう何を言っても工藤君は聞く耳を持たないだろう。そしてもう誰も工藤君を止める事は出来ない。

その日の作戦会議・・・とも言うべきものはそれでお開きになり、私と工藤君は帰路についた。とは言っても、どこで組織の目が光っているか分からないので、あまり人前に顔を出すわけにもいかず、警察が家の近くまで送る、と言う形だ。それも毎日車種

やルートを変えるといった念の入れようだ。変装まがいなことをした事もあった。

「貴方・・・バカよ・・・」

私は車の中で工藤君に言った。

「ああ?何で?」

工藤君はいかにも不満そうに言った。

「・・・本当に死ぬかもしれないのよ・・・」

ねえ?分かってる?貴方が死ねば一体どれほどの人間が悲しむのか?蘭さんはどうするのよ?

「そんな水差すようなこと言うなよ、俺、結構ワクワクしてんだからよ」

この人の考える事は本当に分からない・・・。本当に命がけの勝負を楽しもうとしているのか、それとも恐怖に打ち勝つための強がりなのか・・・今の工藤君の表情からはそれを読み取る事は出来ない。

「死ぬのが・・・怖くないの・・・何度か死のうとした人間が言う事じゃないけど・・・」

「別に。だって死ぬの怖がってたら生きてけねーだろ。いつか誰かに言われたけど人間なんていつ死ぬかわかんねーんだし」

「工藤君・・・?」

「だってそうだろ。もしかしたら今この瞬間に大地震が来て死ん

じまうかもしれねーし、後ろからトラックに追突されない保障もどこにもない。もしかしたら今日帰って寝たらそのまま突然死しちまうかもしれない・・・。死ぬ事なんて考えてたら体もたねーし人生つまんなくなっちまうだろ？」

そう言って工藤君は初めて私の方を見て笑った。夕暮れの中映し出された笑顔はとても哀しそうだった。言葉ではあんな風に言っていてもやはり工藤君は死を覚悟している・・・。

・・・・・

博士と工藤君には「最終的な確認をしておきたい」と言ったがやりたいのはそんなことじゃない。

あの日私は決心した。工藤君を死なせるわけにはいかない。だから組織の本拠地には私が最初に乗り込む。とは言っても、工藤君が聞く耳を持つとはとても思えない。と言うよりも最初から考えていない。だから工藤君には悪いけど、少々強行手段をとる事にした。とは言っても、かつて幽霊船の時に工藤君が私にした事と一緒。ただ、睡眠薬の効き目を少し強力なものにしておくだけ。

それの準備と後は遺書を書いておくこと。そういった意味では「最終的な確認」かもしれない。

私は三通の遺書を書いておいた。一つは博士。一つは工藤君。そしてもう一つ・・・書いても読んでもらえないけれど・・・ど

うしても書かずにはいられなかった。そう・・・三通目は・・・お姉ちゃんに宛てたもの・・・。

私はそれらの作業を終えると地下室から出た。

工藤君の声が聞こえた。どうやら電話をしているようだ。相手は多分蘭さんだろう。工藤君は適当な相槌しか打っていなかったけれど。

他人の電話を聞くのは御法度、私はすぐにその場を立ち去ろうとした・・・。そんな私の耳に信じられない言葉が聞こえてきた。

「もう俺のこと忘れてくれねーかな?」

工藤君・・・?貴方は何を言ってるの?電話の相手、蘭さんなんでしょう?自分の言ってる事、分かってるの?

「ごめん・・・」

そう言って工藤君は電話を切った。そして、おそらく窓の向こうの景色・・・といっても真っ暗だけど・・・なんて見ていないだろうけど、窓の外を向いて立っている工藤君に私は声を掛けずにはいられなかった。

「本当にそれでよかったの・・・」

「聞いてたのか?」

工藤君は外を見たまま私の方には顔を向けずに言った。

「ごめんなさい・・・。聞くつもりはなかったんだけど・・・」

「いいよ、別に・・・」

工藤君は短く言った。

「もう、言ってしまったものは遅いけど・・・何もあんな事言わなくてもよかったんじゃない？電話、蘭さんとだったんでしょう？」

「・・・蘭にだからこそだ・・・」

「・・・どうして！・・・あの娘が貴方のことをどう思っているのか、知ってるんでしょう？」

そう・・・蘭さんは工藤君のことを愛している。勿論直接聞いたわけじゃなけど、そんな事は彼女の行動・表情を見れば一目瞭然。そして工藤君も蘭さんのことを愛している・・・。だからこそ工藤君の行動が信じられなかった。いくら死ぬかもしれないとはいえ、自分が愛している人、自分を愛してくれている人に対する言葉としては冷酷すぎる。

「ああ、知ってるさ・・・自惚れかもしれねーけどな」

「だったら・・・」

「宮野・・・」

「何よ・・・」

「お前・・・明美さんが死んだ時どう思った？」

私は訳が分からなかった。どうしてそこでお姉ちゃんの名前が出てくるのか・・・

「どうって・・・」

「悲しくなかったか？辛くなかったか？」

何を当たり前のことを聞いてるのよ・・・。悲しくないわけないじゃない！辛くないわけないじゃない！今、思い出しただけでも涙が溢れ出てきそうなのに・・・。

工藤君は私が声を出せずにいたことで全てを理解したようだった。最初から分かっていたのだろうけど・・・。

「そうだろ・・・だから蘭には悲しい思いはさせたくない。俺が死んだとしても、アイツの中で俺の存在が消えてなくなっていれば、アイツの中で俺のことがその他大勢の人間になっていれば、アイツは悲しまなくて済むだろ・・・。たとえ俺が死ななかったとして、もうアイツに許してもらえなくても、もう二度と口をきいてもらえなかったとしても・・・アイツが悲しまずにいられるなら俺はそれで構わない・・・」

私は掛ける言葉が見つからなかった。工藤君はそこまで考えていたのか。その選択が正しいものかどうかはわからないけど・・・。

でも安心して、工藤君。貴方は死なない。私が貴方の代わりに組織に乗り込むから。死ぬのは私一人で十分。貴方は蘭さんを幸せにしてあげなさい。彼女なら訳を話せばきっと許してくれるわ。貴方の推理はいつも完璧だったけれど、唯一の推理ミスは蘭さんの愛を過小評価していたことね。もしも貴方が死んだら彼女はきっと悲しむわ。だから貴方は死んじゃ駄目なの・・・。

朝。私は地下室に工藤君に飲ませるための睡眠薬を取りに行った。

ごめんなさいね、工藤君。でも貴方も私に同じことをしたんだからこれでイーブン、恨みっこなしよ？

でも・・・私の考えは甘かった。私は背後の人の気配に気がつかなかった。不意に後頭部に鈍い痛みが走ったかと思うと私は床に倒れこんだ。私を殴った犯人は・・・

「工藤・・・君・・・？」

「悪いな・・・」

そう言うと工藤君は私が隠しておいた睡眠薬をいとも簡単に見つけ出した。

「それは・・・」

私は薄れ行く意識の中、必死で声を絞り上げた。

「そ、お前が隠し持ってて今日俺に飲ませようと思ってた睡眠薬。それがどうかしたか？」

工藤君はどこか楽しそうにも思えるような声で言った。

「どう・・・して・・・それを・・・」

「あれ？もしかしてお前俺が気付いてないとでも思ってた？オメー俺をなめてんのか？お前の考えなんてすぐにわかるって」

「どう・・・する・・・気？」

その質問に対して工藤君は「クックック」と笑いながら言った。

「あのなあ、持ってきたんだからお前に飲ませるに決まってるじゃん」

そう言うと工藤君は私の口にカプセル剤を無理矢理押し込むと水を流し込んだ。

「悪いな・・・お前を行かせるわけにはいかないんだ・・・これは俺の事件だ・・・俺が片を付ける」

そう言うと工藤君は地下室を出て行った。

「まって・・・工藤・・・君・・・お願いだから・・・行かないで・・・」

私は意識を失った。

第五話：失踪の真実2

私が目を覚ました時、床に倒れていたはずなのにいつの間にかソファに寝かされていて体には毛布がかけられていた。きっと工藤君がそうしてくれたのだろう。

私は何とか起き上がった。頭痛が酷いし眩暈もするし、歩くとフラフラする。

「ちょっと強力すぎたかしら？」

自分で作った薬の効果が思いのほか強く、思わず自嘲気味に苦笑いしてしまった。

でもそんな事ばかり考えてはいられない。一刻も早く行かなければ。工藤君が戦っているというのに私だけこんなところで悠長なことをしているわけにはいかない。

鍵は、いつしかの幽霊船の時と違って掛かっていなかった。どうせこじ開けるだろうと思っていたのだろうか？もしくはさすがの工藤君もそこまで意識が周らなかったのかもしれない。

外に出ると既に陽はかなり西に傾いていた。もうあれから何時間が経ったのだろうか？

――夕陽・・・世界を血に染める・・・
太陽の断末魔・・・――

その夕陽は、私がこの街に来てから

いや、今まで１８年間生きてきたなかで・・・

今までに見たこともないような・・・

神秘的とも言えるほど綺麗さで・・・

それが逆に何か不気味で・・・

本来抽象的なものは嫌いなんだけれど・・・

何か嫌な予感・・・

胸騒ぎがして・・・

この時間なら工藤君はもう組織に乗り込んでいるはず。そしてもし、彼の目論み通りに組織のデータを発見する事が出来ていれば、もう警察側にデータは送信されているはず。そうであれば組織を壊滅させるための・・・と言うよりは本部を潰すための・・・作戦が練られているはず。そして工藤君は・・・。

もう組織を抜け出して戻ってきていると信じたい。

しかし・・・

あの組織がみすみす侵入者を逃すだろうか？人を殺す事を何とも思っていない組織だ。もし組織の人間に見つかってしまえば・・・

「馬鹿。私がこんな事を考えてどうするのよ」

私は自分が恐ろしいことを考えていた事に気付きその考えを振り払うように首を振ると捜査本部・・・とも言うべきところに急いだ。

私が警察の内部で秘密裏に作られていた捜査本部の部屋に入ると私が何故この時間まで姿を現さなかったのか、それを問い詰めようとする人はいなかった。もしかしたら工藤君が話しておいたのかもしれない。もっとも今ここにいるのはほんの数人で部屋の中は水を打ったように静まり返っていたけれど・・・。

「それで・・・データは？」

「無事に送られてきた」

短い答え。そのデータを基に、元々考えられていた案を具体的にしていったらしい。ただ人員確保の都合で組織の「日本での」本部への突入は明朝６時になるとの事。「アメリカでの」本部にもほぼ時を同じくしてＦＢＩが突入するらしい。

「それで・・・工藤君は？」

一番気になっていた事。返ってきた答えは

「分からない」

「分からないって・・・どういうことですか・・・」

私はもう何が何だか解らなくなっていた。いや、正確には工藤君が今如何いう状況に置かれているのか。容易に推測はついた。それはこの場所に足を踏み入れた時から何となく想像はしていた。空気がとても重いものだったから。ただそれを解りたくなかった。認めたくなかっただけだ。

それは先程も考えていた事なので、ある程度覚悟はしていたけれどきっと工藤君は組織の人間に見つかって拘束されたのだ。もしかしたらもう・・・

そこまで考えて自分がまたとんでもない事を考えていた事に気がついてその考えを必死に振り払った。

ついさっき自分で否定したはずの考えをまた抱いてしまった自分に少し呆れてしまった。

こんな事を考えてはいけない。もし仮に工藤君が組織の人間に拘束されていたとしてもきっと組織は簡単には工藤君を殺さないはず。きっと拘束して侵入した理由くらいは問い詰めるはず。しかも工藤君は組織内では自分達が殺した事になっているはずの人間だ。それはそれで勿論いいことであるはずもなかったがそこに掛けたかった。勿論。無事であれば一番いいことなんだけれど・・・

「その様子だと、貴方にはクール・ガイが今どんな状況に置かれているのか、想像がついているようね」

私の表情を読み取ったのだろう。話しかけてきたのは、ＦＢＩのジョディ・スターリングだった。

「ええ、出来れば考えたくはないんですが・・・」

私は今自分が考えていた事を話した。

「なるほどね・・・私達とほぼ同じ考え方だわ。貴女はすぐにでも乗り込みたいでしょうけど・・・。今は耐える時よ。今下手に行動するとクール・ガイの勇気も無駄にしてしまうでしょうから」

「解ってます・・・。しっかりとした体制で行かないと返り討ちにあうだけですから・・・。どの道私には彼の無事を祈る事くらいしか出来ないですけど・・・」

気がつくと、外はもう真っ暗になっていた。今日は私もここに泊まることにした。夕食を出されたけど、殆ど手をつけなかった。勿論昨日の夜から何も食べていなかったけど、そんな余裕があるはずもなく・・・。

その夜、私は仮眠をとる事を勧められたが工藤君のことを考えるとどうしても眠る事が出来ずにいた。

「工藤君・・・お願いだから・・・無事でいて・・・」

何度声に出したか分からない。幸か不幸か周りに人はいなかったから聞かれることはない。

やっぱり何としてでも工藤君を止めるべきだっただろうか？

別に焦らなくてもゆっくりと時間をかけて捜査を進めていけば、何も組織に潜入するような危険を冒さなくてもほぼ正確に組織の現状を掴む事が出来たはず・・。

でも、工藤君はそれで納得するような人じゃなかった。らしいといえばそうなんだけど。

「でも、それだとその間にもどんどん組織の犠牲になる人が出てくるだろ？」

「それはそうかもしれないけど・・・」

「お前だってあの薬の犠牲者をもうだしたくないんだろ？」

そこを突かれると私には何も言えない。けれど・・・。

「でも、何度も言うようだけど・・・それじゃ殺してくださいって言ってるようなものなのよ・・・」

「だからそれがどうしたんだよ。これ以上犠牲者を出さないためにはそれがベストなんだよ。いや、今この瞬間も犠牲者が出続けているかもしれない。ホントは今からでも乗り込みたいくらいさ」

工藤君は少し怒ったように言った。

貴方は自分の命の事をどう思っているの？

その質問は似たような事を前に聞いたし、返ってくる答えが容易に想像できたのでしなかった。

でも工藤君・・・貴方が死ねば悲しむ人が大勢いるのよ。貴方のご両親は勿論・・・他にも沢山の人が・・・

それに・・。蘭さんのことはどうするの？

そう、工藤君が死んだら悲しむ人間は大勢いるけれど、私が死ん

だとしても悲しむ人はいない。

そう思って、工藤君の代わりに私が乗り込むつもりでいたのに、結局はこの有様で・・・

改めて自分がいかに無力な人間であるかを思い知らされた。ただこの場所で祈る事しか出来ないのだから。

今こうしている間にも工藤君の身に危険が及んでいるかもしれないと言うのに・・・。

気がつくといつの間にか時計は5時を指していた。一年の内で最も日の短い季節だからまだまだ真っ暗だけど・・・。

私はここで待機しているように言われたけれた。（彼らにしてみ

れば、組織にいた私は組織に踏み込むにあたって足かせになると思われていても仕方がないというのは分かっていたけれど）

分かってはいても、それはとても辛い事だった。気の遠くなるほどゆっくりと流れていく時間の中で、不安、苛立ち、後悔、自責の念、等々・・・次々と沸き起こってくる感情と戦っていた。いっそのこと本当に自分が乗り込んで組織のデータと引き換えに自分が殺されてしまっていた方が楽なのではないかとさえ思ってしまうくらいだった。もし工藤君が聞いたら自分の事は棚に上げて顔を真っ赤にして怒るんだろうけど。

無限にも思えてくる時間の中でどれくらい待ったかは分からない。いや、時計を見たらほんの数時間も経っていなかったのだけれど、そんな事実とはお構いなしに私にはもう何十時間も待ったかのように感じられていた。

ようやく

「作戦は取りあえず成功。同時に拘束されていたと思われる工藤新一を発見」

との一方が入った。

待機していた人々に安堵の表情が漏れた。ただし、こちら側にも若干の犠牲者が出たようだが。それに組織の中枢は潰せたと言っても、組織の中で重要なポストにいた危険人物や、実行部隊とも言うべき末端の構成員が世間に散らばっている状態なので油断は出来ない。けれど、中枢が潰れてしまって、指揮する人間がいな

くなってしまった今、末端の構成員がこれ以上罪を重ねるというのは考えにくいだろう。ただ、これは後にって思ったことで、この時はそんなことを考えている余裕はなかった。

「それで、工藤君は?無事なんですか?」

この時の私には工藤君のことしか頭になかった。

「相当の重症を負ってはいるが、息はまだある」

その言い方が、・・・まるでもう工藤君は助からないと言っているようで・・・それが私の中の不安をより大きなものにしていった。

工藤君は秘密裏に病院に運ばれるとの事。
工藤君がこの作戦に参加していること自体極秘事項なのだから当然といえば当然かもしれないけど・・・。

私は無理を言って病院に連れて行ってもらうことにした。私が居たところでどうすることも出来ない。何の力にもならないということは重々承知していた。それでもここでじっとしている事はどうしても出来なかった。

「工藤君・・・お願いだから死なないで。死んじゃだめ。貴方はまだ死んではいけない人なの・・・」

病院へと向かう車の中、私は昨日の夜と同じように何度も何度も呟いていた。

私が病院に着いたときにはすでに工藤君の緊急手術は始まってい

た。

突入した部隊が工藤君を発見した時、既に意識はなかったらしい。生きていたのが不思議なくらいの重症だったらしい。十数時間に渡る手術の末、工藤君は奇跡的にも一命を取り留めた。

第五話：失踪の真実2（後書き）

＊井戸端会議＊

快斗「へえ・・・工藤も大変なんだな・・・」

和葉「なんであんたがここにおるん？（苦笑）」

快斗「いや、この前出演依頼状が来てたのに全然お呼びが掛からないから来てみたんだけど・・・」

和葉「ああ、何かそれヤメ（中止）になったらしいで」

快斗「ゲッ、マジかよ。にしてもさ・・・最後の方の描写特にテキトーすぎねーか？」

和葉「それ言うたらあかんて・・・」

（ほっとくと本文より長くなるので強制終了）

少し中途半端なところで終わってしまいましたが続きは次回ということで。

読んでくださった方ありがとうございます

感想とかいただけたら嬉しいです。

「もっとこうしたほうがいい」といった建設的な批判も大歓迎です。

それでは

第六話：動き出す時間

蘭が夏休みの、三年生を対象にした、大学受験へ向けての夏期講習を終え、帰路に着いていた。これから、蘭の中であの日で止まっていた時間が再び、それも急激に動き出すとも知らずに・・・。

家に戻ってきたとき、二階の探偵事務所の入り口の前で立っている一人の女性を見つけた。少し赤みがかった茶髪をした、若い、もしかしたら１０代かもしれない女性。下を向いていてさらに横顔がその髪の毛で隠れているので顔立ちや表情は分からない。
いったい事務所の前で何をしているのだろうか？

「あの・・・探偵事務所に用ですか？だったら今日は・・・」

もしかしたら呼び鈴を鳴らしても反応がないので困っていたのかもしれない。蘭はその女性に声を掛けた。何か小五郎に頼みたいことが有ったのかもしれないと思ったのだ。
生憎、今日は小五郎は昨日入った久しぶりの仕事で出掛けていて留守だったのだ。

蘭に声を掛けられた女性は顔を上げると蘭のほうを見た。整った顔

立ちに、色白の肌。
形容するなら「奇麗な人」とか「美人」と言ったあたりか。

「いえ、あの・・・」

その女性は少し困ったように蘭に話し掛けた。

「私は・・・蘭さん・・・あなたに用があって来たんだけど・・・」

そう言われて蘭は驚いた。どうしてこの女性は自分の名前を知っているのだろうか?しかも探偵である父の小五郎に用があるのではなく自分に用があるのだという。初対面、少なくとも蘭にはそう思えた。その女性が自分に言ったい何の用なのだろうか?

「どうして・・・私の名前・・・それに・・・私にいったい何の用ですか?」

蘭は少し警戒するように聞いた。醸し出している、オーラと言うか、雰囲気と言うか、抽象的な表現になるのだが、なんとなくそのようなものから考えるに、悪徳商法とかなにか犯罪がらみとかそういった類の物ではないと思う。それでも自分の全く知らない人物が自分の名前を知っていて、自分を訪ねて来たとのだから、どうしても相手を警戒してしまうのは無理もない事かもしれない。「人を見たら泥棒と思え」という諺

ではないが、これだけ犯罪しかも重犯罪でも簡単に起こる現代の社会ではむしろある
程度は必要なことかもしれない。

「あなたは私を知らないかもしれないけど、私はあなたのこと少しは知っている・・・
そんなに警戒しなくても、あなたに危害を加えるつもりはないから安心して」

そう言うとその女性は安心させるためか、蘭に向かって微笑んでみせた。営業用、とか
そう言うものではなかったが、少し無理をしているような気が蘭にはした。

「そうなんですか・・・それで・・・話って言うのは?あ、ここじゃあなんですから中
へどうぞ」

蘭にはまだ少し附に落ちない部分があったが、とりあえずずっと外で話をしているのも、
と思ったので鍵を開けて探偵事務所のほうに招き入れた。

いつもは依頼人と小五郎が打ち合わせなどをしているソファで蘭はその女性と向き合っ
た。いざ向き合ってその女性の顔を見てみると、確かに整った顔立ち、もっと簡単に言

うと先ほども書いたように、同じ女性である蘭からみても「奇麗」と思う顔立ちなのだが、どこかあまり生気が感じられないようでもあった。肌も色白と言うよりは蒼白と言ったほうが正確かもしれない。

その女性暫く黙っていたが、やがて何かを決心したように、持っていたカバンの中から一枚の写真を抜き出すとそれを蘭の前に差し出した。

「蘭さん?あなたこの人知ってる?」

その写真を見た蘭に衝撃が走った。女性が見せた写真に映っている人物は、今蘭のココロを支配している人物。もっとも会いたい人物。そう、そこに映っていたのは紛れもなく新一だった。

「これ・・・新一・・・・」

蘭には訳が分からなかった。何故目の前にいるこの女性が新一の写真を持っていて、しかも自分に「知っているか?」と訪ねるのか?

「やっぱり、忘れてなかったのね・・・」

そういうと「フッ」と蘭の目の前にいる人物は笑った。どこか安心したようにも感じられる。

この人は何者なのだろう?やっぱり忘れてなかったのね…とは如何言うことだろうか?

その言葉が出てくると言うことは少なくともうかれこれ半年以上も前、新一が自分に対して「俺のことを忘れてくれ」と言ったことを知っている人物、と言うことになる。

いったい何故この人がその事を知っているのだろうか？「この人と新一が付き合っていて自分に別れを告げたのではないか？」とかそういう考えは不思議と出てこなかった。もう何年も新一と共に過ごしていたのだ。たとえ「幼馴染」という枠を超えた事は無かったとしても、いつも自分の隣には新一がいたのだ。色々な事を教えてくれたし、何かに挫けそうになったときや落ち込んだりしたときは誰よりも慰め、励ましてくれた。もし新一にあう事が出来なかったらきっと今の自分はいなかっただろうとさえ思う。その新一が自分の中で恋愛感情とか以前に掛け替えの無い大切な人になったのは一体いつの事だろうか？そんな事は忘れてしまった。というよりも時期なんてどうでもいい。その気持ちに偽りが無ければ。その事実が確かにそこにあれば。

そんな人の事なのだから、あの時の深刻そうな声、辛そうな口調・・・そういった物から判断するととてもそういう事には思えなかったのだ。

「あの・・・どういうことですか・・・？それに・・・あなたは一体・・・」

何者なんですか？と蘭が言う前にその女性は答えてきた。

「ごめんなさい。まだ名前言ってなかったわね・・・私の名前は宮野志保・・・いえ、
あなたには灰原哀と言った方が通じるかしら？」

その言葉は蘭に衝撃を与えた。

第六話：動き出す時間（後書き）

＊井戸端会議＊

志保「なんなのこの小説は?駄文もいいところね」

作者「すいません」

志保「前回と全然繋がってないじゃない」

作者「ウッ・・・、その間に何があったかは追い追い説明していこうかと・・・」

志保「０．１%しか信用できないわね」

作者「・・・」

本当に展開飛びすぎですね。久しぶりの投稿なのにすいません
でも本当に追い追いその後新一に何があったのか明かしていきたいと思いますので
それでは読んでくださった皆様ありがとうございました。
たぶんもう少しで終わります（早！）ので最後までお付き合いしていただけると
嬉しいです

第七話：告げられる真実

「灰原哀って言ったほうがあなたには通じるかしら？」

その言葉は蘭に衝撃を与え混乱させた。

確かに言われてみれば、コナンとほぼ時を同じくしてこの町を去っていった、どこか大人びた雰囲気を持った少女に似ている。しかし彼女は小学一年生のほんの子供だったはずだ。しかし今目の前にいる人物は少なくとも１０代の後半くらいだ。蘭の知っている灰原哀と言う少女とは１０歳は年が離れている計算になる。蘭には宮野志保と名乗った人物の言ったことがどうにも解せなかった。

「あの、私には何のことだか・・・」

「まあ、確かににわかにこんな事を言っても信じろと言うほうが無理があるわね、私が灰原哀と名乗っていた頃には小学生の身体だったわけだし」

志保は落ち着いた口調で言うとさらに続けた。

「でもね、蘭さん私がこれから言うことは全て事実なの。それがどんなに信じられない
ことでもね。これから少しの間私の話を聞いていてくれるかしら？
まあ信じる信じない
はあなたの自由だけど」

最後のほうは有無を言わせないような少し強い口調だった。

「はい・・・」

蘭にはそう返事をする事しか出来なかった。

「そうね・・・じゃあ、やっぱり私の事から話さなければいけないわね。あなたも
この前、と言ってももう半年も前になるわね。世間を騒がせた裏組織の事は知って
るわよね」

「はい」

「私もその組織に入っていてね、そこである薬の開発に携わっていたのよ」

蘭は驚いた。志保は事も無げに話しているが蘭にはその話しがとんでもないことのように思えた。すでに世間的に見れば終結した事件だが、その組織にいた人物が今自分の目の前にいると言う事実。それが蘭には信じられなかった。

「でも、ある時、私と同じように組織にいた姉が、組織の手に掛けられて殺されてね、組織にその事を問いただしても答えてくれなかった。そこで私は対抗手段としてその薬の研究を中止したんだけど、組織に反抗した私は拘束されたわ。そしてどうせ処刑されるのなら、死のうと思って隠し持っていた研究した薬を飲んだのよ」

志保はいつしかコナン（新一）にした話しと同じような内容の話しを蘭にしはじめた。

蘭は未だ「信じられない」と言った表情をしている。志保が言ったように信じろと言うほうに無理があるのだろうが。

「ところがその薬は私を殺さなかった。もしかしたら死んでいたほうがマシだったのかもしれないけどね。目が覚めたら。自分の身体が縮んでいたわ。尤も、マウス実験で一匹だけ死なずに幼児化したから、薬の副作用だって事にはすぐに気がついたけど、さすがにゾッとして暫く震えが止まらなかったわ。まあ結果的にはそれが幸いして私は組織から抜け出せたんだけど、どこをどうさまよったのか、もう忘れちゃったけど、気がついたら私は工藤君の家の前で倒れていたらしいわ。そこを私は阿笠博士に拾われて、組織の目を欺くために灰原哀と名乗って小学生として生活を始めた・・・」

そこまで話すと志保は一息ついた。そして

「ここまでで、何か聞いておきたい事はあるかしら?」

と蘭に聞いた。

蘭は混乱していた。事前に全て事実だと言われていたし、嘘を吐いているとは思えなかったが、そんなマンガやドラマのようなことが果たして本当に有り得るのだろうか？
いや、もしそんな薬が実在するとしたならば、その存在が合点の行く人物が1人いたのだが、それを考えるのが蘭には恐かった。考えたくなかったと言ったほうが正しいかもしれない

「それが・・・新一のこととなんの関係があるんですか？」

蘭が志保に聞いた。恐る恐るといった感じで。

「あら、あなたは薄々感づいてるんじゃないの？工藤君もその薬を投与されて幼児化し江戸川コナンとして生活していたって・・・」

コナン＝新一。その事実は蘭の心に深く突き刺さった。話の途中からそんな予感はしていたし、何度かそうじゃないかと考えたこともあった。事実そう考えると、全て辻褄が合うのだ。ただそれでも現実としていざ突きつけられるとそのショックは蘭にとって大きな物だった。

しかも悪意の篭った言い方をすれば、新一をそんな目に合わせた張本人の口からその事

実を告げたのだから。

恨みだとか、憎しみといった感情は出てこなかった。そんな余裕も無かったのだろう。

蘭は志保が言っていることを理解するので精一杯だった。

「それで・・・新一は今・・・どこにいるのか・・・知ってるんですか？」

蘭は必死に声を振り絞る様にして言った。

正直、続きを聞くのが恐かった。新一と組織のことに関しては色々と噂が流れていたから、もしかしたら最悪の事態になっているのかもしれない。出来ればそうでないと願いたいのだが、嫌な予感が蘭の頭から離れなかった。

志保は暫く何かを考えるように黙っていたがやがてゆっくりとした口を開いた。

「知らないと言えば嘘になるわね・・・」

つまりそれは蘭の質問に対し肯定しているということ。

「どこに、どこに居るんですか？新一は？」

蘭はすがる思いだった。しかし・・・

「死んだわ・・・」

「え?」

その言葉は

「私が殺したのよ」

蘭の心の全てを

完膚なきまでに

粉々に

砕いていった

第七話：告げられる真実（後書き）

＊井戸端会議＊

蘭「ちょっと何なのよこれは！」

作者「何って小説ですが」

蘭「貴方新一に一体何をしたのよ！」

作者「落ち着いてください、蘭さん（汗）」

蘭「落ち着いてなんかいられないわよ！」

ドカ☆バキ☆ズコ☆

（作者気絶）

和葉「あかんやん蘭ちゃんウチにも残しといてくれな」

もう勘弁してください（汗）

（お粗末さまです）

えーとまあ何というか・・・前回と分ける意味があんまりないような気もするんですが・・・

とにかく読んでくださった皆様ありがとうございます

そしてもう少しお付き合いいただければ幸いです。

第八話：そして、再会へ・・・

＊＊＊＊＊＊＊

工藤君は奇跡的にも一命をとりとめた。勿論まだ意識は戻っていなかったけど。それにまだ予断を許さぬ状況であり、このまま意識が戻らずに植物状態のままという可能性も残っていた・・・。

それでも「一命をとりとめた」という事で「黒の組織」の事件の関係者は皆、ほっとしたような表情をしていた。もっとも、もし工藤君が死んでしまえばさすがに公にしないわけにもいかず、もしそうなった場合、自分達は世間の批判の矢面に立たされていただろうが、最悪の事態は避けられそうだ・・・と言った具合の、少々自分勝手な理由もあったのだろうけど。

それでも、この事態を報告しないわけにはいかない人物がいる。それは他ならぬ工藤君の両親である有希子さんと優作さん。さすがに工藤君の実の両親にこの事実を隠すわけにもいかないだろう。そもそも工藤君がこの件に関与する事に二人には知らされていたので、特別どう、ということはなかったのだけど。

ただ、本来は緘口令が敷かれていたことなので、いかに工藤君の両親だとは言っても本

当に信頼できる人間かどうか入念に調査が行われたみたいで・・・。
これに関しては工藤君や私に対しても同じ事が行わた。当然と言えば当然だろう。警察
やＦＢＩにしてみれば協力を申し出た（工藤君の場合は半ば「無理矢理」といった感じ
ではあったけれど）人物が実は「組織が送り込んだ人物だった」などということになっ
ては全てが水の泡となってしまう。そのことに関しては私も工藤君も、工藤君のご両親
の重々理解していたので、別に嫌な気はしなかった。優作さんにいたっては逆にその調
査振りを評価していたほどだった。

＊＊＊＊＊＊

工藤君が意識を取り戻した時、世間では既に夏になっていた。
病院から工藤君の意識が戻ったと言う連絡が入ると、私を含めた「黒の組織」の事件の
関係者が工藤君の病室に集まった。
彼らにしてみれば、あの日の工藤君の行動、如何いう経緯で瀕死の重症を負ったのか・・・
等々、聞きたいことはたくさんあるだろうから無理もないことかもしれなかったのどろ
うけど。

この間私は警察とＦＢＩが用意した場所に身を潜めていた。実は壊滅したと思われてい
た組織だったけれど、表向きのボスとは別にもう一人、影の支配者

とでも言うべき人物
が、数人の幹部クラスや有能な暗殺者らとともに極少数ではあったが身を潜めていて、
その人物らが報復として、組織を一応の壊滅に追い込んだ人間の命を狙う可能性は十分にあったから。

いえ、あったわね・・・。実際に米花町の工藤邸の周辺で不審人物が度々目撃されていたし、一度だけだったけど、私の居場所をその暗殺者の一人に見つかって危うく殺されそうになったことがあったから・・・。
その時は身辺を警護していたＦＢＩの捜査官によって寸前のところで事無きを得たけれど、
つまり、数は少なくてもその存在は非常に危険だと言う事を証明するには十分だった。

＊＊＊＊＊＊＊

「死んだわ」

「私が殺したのよ」

蘭は底のない深い深い奈落に突き落とされた気分だった。そんな蘭のただならぬ様子を志保が察知したのか

「あ、ごめんなさい。死んだ・・・と言うのは少し言いすぎだったわね」

と慌てて訂正した。冗談では通じない事だし、冗談で言ったつもりなど更々無かったが、少々過大な表現をしてしまったことを後悔した。

「じゃあ・・・新一は・・・」

真っ暗な暗闇に、弱弱しい、わずかな光ではあったが、その光は確実に蘭の心を照らしていった。

「ええ、生きてるわ。体もコナンから工藤新一の体に戻ってるしね」

「じゃあ・・・死んだというのは・・・」

蘭の不安はまだ消えていない。蘭の中の暗闇を消し去るには、先ほどの光だけではまだ足りなさ過ぎた。その光だって、もしかしたら簡単に消えてしまうものかもしれない。もっと大きな、明るい光が欲しい。そのためには志保が新一は死んだと言った真意を聞きたかった。「少し言いすぎ」と言ったという事は死んでいないにしてもそれに近い状態ということか？とにかく今の新一の状態を早く知りたかった。

「まあ・・・それは・・・。あなたの知っている工藤新一はいないっていったところかしら。いえ、あなただけじゃなくて世間一般の認識の中の工藤新一はもういないってところね」

自分の知っている工藤新一はいない・・・それは一体どういうことだろうか？蘭は色々と考えてみたが、考えれば考えるほど分からなくなっていくだけだった。

「あの・・・意味が分からないんですけど・・・」

志保は「まあ、当然かもしれないわね」と前置きした上で

「じゃあ、最初から説明しましょうか・・・」

と言って話し始めた。

「最初に言っておくけれど、これは本来外部の人には漏らしてはいけないことなのだから今からする私の話は決して他の人には話さないで欲しいの。それが約束できないのならあなたに話すわけにはいけないけど、約束できるかしら?」

蘭は静かに首を縦に振った。

「本当は私から話すより工藤君が話したほうがいいし、彼もそのつもりだったんだけど、まあ彼の状況を考えると仕方のない事ね・・・」

それから志保は自分（哀）と新一（コナン）について更に詳しい話をした。そしてあの冬の日の組織壊滅作戦に自分と新一が参加していたことも、その作戦のさなかで新一が一時生死を境を彷徨う大怪我をしていたことも・・・。

その話を聞いたとき、蘭は一時的にでも自分に突然の別れを告げた新一を責めた事を酷く悔やんだ。まさか新一がそんな事になっていたとは思いもしなかったから仕方がない

ことなのだが、蘭はそうやって割り来る事の出来ない性格なのだろう。

「まあ、そう言うことだから、工藤君の判断が正しかったかどうかは私には分からないけど、彼は彼なりにベストの判断をしたのよ、無闇に貴方を巻き込まないためにもね。だからあなたには工藤君を責めないで欲しいって言おうとしたんだけど、その心配は杞憂だったようね」

そう言うと志保は

「責められるのは私一人で十分だからね」

と自嘲気味に笑いながら続けた。

「私は・・・別に・・・」

蘭は志保の言った事に対して全てに納得したわけではなかったが、今志保の話を聞いて、彼女を責める気にはとてもなれなかった。彼女は自分や新一よりももっと辛い目に遭っていたのだろう。そう考えると志保を責める気にはなれなかった。新一＝コナンという事実に関しても、平次や博士も知っていて、知らなかったのはほとんど自分だけだったということにショックは受けたが、新一たちがそのようにした理由を聞くととても新一に対して文句を言うきにはなれなかった。寧ろ、新一が自分のこと

を考えていてくれて
いつも護ってくれていたということが分かって嬉しかったのだ。

「そんなつもりは・・・それよりも、今新一は・・・」

それは蘭の一番知りたい事・・・。
志保の答えは・・・？

翌日・・・

蘭は志保に連れられて新一が入院している病院へと向かった。
抵抗を続けていた組織の残党は一週間前にようやく全員が捕まり、
本当の意味での終結
を迎えていた。志保は置かれていた状況や、経緯、その他多方面の
意図等、様々な事情
が考慮され罪に問われることは無かった。それが志保にとって幸せ
な事なのかどうかは
分からないが・・・。

結局新一と志保がこの件に関与した事は伏せられる事になった。マ
スコミの餌食になる
事を避けるため、と言うのが表向きの理由になっている。

米花総合病院の特別病棟、そこに新一はいた。

「こんなにも近いところにいたのに会えなかったのか・・・」

と蘭は少し苦笑いした。
たしかに蘭の家から数キロと離れていないところにずっと新一はいたのだ。それなのに
会えなかった。背後に大きな事情があったから仕方がなかったとはいえ、なんとも皮肉
なものだ。手を伸ばせば届きそうなところにいたのだから。
病室の前、患者の名前が書かれているところには念のためか「工藤新一」の名前は書か
れていなかった。

蘭は少し中に入ることを躊躇っていたが、志保に促されると軽くノックをして扉を開け
た・・・。

そこにいたのは紛れもなく新一だった。蘭が最後に会ったときより随分と痩せてしまっ
たような感もあるが、それでもそこにいる人物が新一であると言う事に変りは無かった。

「新一・・・」

名前を呼ばれた新一は不思議そうな顔で蘭を見ていた。

第八話：そして、再会へ・・・（後書き）

和葉「暗い、暗すぎるで、この話！」
作者「そんなこと言われたって・・・」
和葉「しかもおもろないし（ぼそぼそ）」

いや、ホント暗いです。
しかも短い話なのに最初の方と辻褄合わない部分ありそうだし・・・
では読んでくださった皆様ありがとうございます
多分次で終わります。

最終話

6月・・・。日本列島は北海道を除いて「梅雨」と言われている、恐らく最も日本人に嫌われているであろう時季の真っ只中である。この日もその例に漏れず、東京は雨こそ降っていないものの空はどんよりと曇っていて、ジメジメと蒸し暑い。不快指数が云々言われるまでもなく不快な季節である。

「いらっしゃい和葉ちゃん。久しぶり」

玄関の扉を開けると蘭は和葉を招き入れた。

「うん、めっちゃ久しぶりやなあ。こうやってゆっくり会うんは・・・去年の3月以来やっけ？」

世間を震撼させたあの「黒の組織」がＦＢＩ等の手によってその存在が薄暗い暗闇から白日の下に晒されたあの日から、すでに数年の歳月が流れていた。既にその組織にいたメンバーの殆どは公判を終え、再び薄暗い暗闇で生きているで・・・監獄と言う名の、ではあるが・・・世間的にはこの事件は終結している。しかしだからといって、それはあくまで世間的にであって、組織の手に掛かって殺された人の遺族

や、知らないうちに
組織の犯罪行為に加担していた人達や、それと知らずに利用されていた人達の心の傷が
消えると言うものではない。そういう意味では事件が終結する、ということは本当はありえないのかも知れない。

「うん・・・そうだね・・・４人で旅行に行ったとき以来だから・・・」

蘭が出会ったころから、和葉は元々オーバーアクション気味の所のある少女だったが、
「少女」はとうに卒業し成熟した大人の女性となった今でもそれは変わることは無く
今回も蘭に抱きついてきそうな勢いだったので、蘭は少々苦笑いしながら言った。

蘭の言ったとおり、和葉と蘭がゆっくりと会うのは久しぶりのことだった。お互いに大
学を卒業し、就職してからはなかなかお互いの都合がつかずにゆっくりと会うことが出
来なかったのだ。就職、と言っても蘭の場合は自分の母親と同じ道を志し、さすがに在
学中に司法試験に合格する・・・とは行かなかったが現在は英理の下で働いているのだ
が・・・。だから、新一と平次も含めて４人で大学の卒業旅行に行って以来（新一は大
学に通っていなかったが）、ゆっくりと会うのは本当に久しぶりだ

った。

「あれ・・・工藤君はおらへんの?さっき工藤君電話に出てたやん?」

和葉が東京駅に着き、これからそっちへ行くとの電話を入れたとき、電話に出たのは確かに新一だった。その新一の姿が見当たらない。よく考えて見れば玄関に靴がなかったような気もする。

和葉の疑問に対し、蘭は呆れ半分、諦め半分、と言った感じで

「新一が、急に出掛けるなんて『あれ』しかないじゃない」

と苦笑いしながら言った。蘭の言った「あれ」が「事件」であることは言うまでもない。

「もう・・・ホンマに工藤君もしょうがない奴やなぁ」

勿論和葉も「あれ」が何であるか瞬時に理解し、それに対し呆れ気味で言ったのだが、本来なら一緒に来るはずだった平次がこの場にいない理由もまた、新一と同じであるため大きな声では言えなかった。

「しょうがないよ・・・。それが新一なんだから。それにね、自分でも本当に莫迦だと

思うんだけど、なんかそういう新一みてると、ああやっぱり新一は新一なんだなあって
ちょっと安心・・・って言う言葉が適切かどうかは分からないけど、そういう風に思っ
ちゃって、結局は何も言えなくて・・・」

「はいはい。ごちそうさま」

「結局ノロケてるやん」・・・和葉はそう思ったが勿論自分にも思い当たる節があるの
で声に出しては言えない。言ってしまうと反撃されることは目に見えている。

「でも・・・ホンマによかったやん。今まで色々あったけど・・・今回こういう形にな
ったんやから・・・」

和葉は蘭がキッチンから持ってきたコーヒーを「あ、ありがとう」と言って一口飲んで
から言った。

「うん。そうだね・・・」

蘭も運んできたコーヒーを一口飲んでから言った。

＊＊＊＊＊＊

「記憶・・・喪失・・・？」

蘭は「宮野志保」と名乗ったその女性から聞かされた言葉に愕然とした。「記憶喪失」
文字にすればたったの４文字であるこの言葉の持つ意味の重さは、
記憶喪失を経験した
蘭自身、よく分かっていた。そしてそれによって自分自身が周りに
迷惑を掛け、心配さ
せ、計り知れないショックを受けさせるのかも。

だから、目の前の人物が言ったことを、勿論とてもウソを吐いている
とは思えなかった
がにわかには信じたくないことであった。

「ええ、自分が誰であるのかすら覚えていないわ。まあ病院に運ばれた時には肉体的に
も精神的にもボロボロで、生きていたほうが不思議なぐらいだったらしいから、精神的
なものも少しはあったみたいだけど・・・彼の場合はあなたの場合と違って脳損傷が主
な原因らしいから、あなたには辛いでしょうけど・・・恐らく工藤君の記憶が戻ること
は永遠にないわ・・・」

蘭は今のこの瞬間ほど「夢であって欲しい、悪い冗談であって欲しい」と思ったことは
無かっただろう。ただそれは考えても意味のないことで、考えれば考えるほど虚しくなるだけのことであって・・・、しかし彼女の口から告げられた事はあまりにもショックな内容で・・・そう思いたくなるのも無理のない事だろう。

「まあ・・・、あなたには・・・残酷でしょうけど・・・これが真実よ・・・」
志保はいつの間にか席を立ち、窓の外を見ていたので・・・景色を見ているようではなかったが・・・蘭からは表情は読み取れないが微かに声が震えているので、だいたいの想像は出来るだろう。

「きっとこの人も辛いんだ・・・この人だけじゃなくて・・・新一の両親や・・・もしそれを知ったら服部君や博士も・・・」

自分だけが辛いわけじゃない、そう考えると蘭はこの場で泣き出したい気持ちを必死にこらえた。

翌日――――

「じゃあ後は二人でゆっくりね」

志保はそういうと病室を出た。

「お話は伺ってます。あなたが蘭さんですか。はじめまして・・・
じゃないんですよね・・・
すいません。何も覚えてなくて・・・」

蒼白い顔をしていた新一は申し訳なさそうに言った。声も若干弱々
しいだろうか?

「ううん、気にしないで・・・」

蘭は気丈を装って言ったが、やはり新一から発せられた言葉はショ
ックだった。新一に
は一切の記憶が無いということは事前に聞かされて分かっていたこ
とではあったが心の
どこかで何かの間違いではないかとも思っていたのだ。いざ事実と
して突きつけられる
とそのショックは計り知れないだろう。目の前にいるのは紛れもな
く工藤新一であり、
声音も、自分を見つめる青い眼も工藤新一そのものだ。ある一点を
除けば蘭の前から姿
を消した新一と変わるものは何もなかった。「記憶」という一点を
除いては・・・。
蘭はしばらく新一にどう話しかけて言いか分からずにいた。話した
いことはいっぱいあっ
たはずなのに。例え新一がそのことを分からなかったとしても。た
だ、会えただけでも
十分だ、とも思えた。

静寂が二人のいる空間を包み込んだ。都会の喧騒や、夏の象徴であ

り、自分の存在をア
ピールするかのような、セミの鳴き声も、まるで、別世界であるかのような・・・いや、
この空間こそが別世界なのかもしれない。蘭が掛ける言葉に困っていると、以外にも新
一のほうから声を掛けてきた。

「――――――」

「え？」

「――――――」

・・・・

「あなたならそう言うと思ってたわ」

許可された面会の時間が終わり、病室を出たところで蘭は待ってい

た志保に促され近くの喫茶店に入った。

そこで蘭は志保に、「これからどうするのか？」と聞かれたのだ。蘭の答えは一つだった。「新一と一緒にいたい」志保自身返ってくる答えは一つしか無いと確信していたのだが、それを確認しておきたいというのもあった。

「じゃあ、これから色々辛いこともあるでしょうけど・・・頑張ってね。あなたになら出来るわ、いえ、あなたにしかできないことかもしれないわね」

新一がこれから社会に復帰するには相当な努力が必要になるだろう。勿論それは1人では到底不可能で、当分は介添人のような人物が必要だろう。精神的にもまだまだ不安定な状況であるし、下の生活が出来る程度の身体を取り戻すにもかなりの時間が掛かるだろう。大怪我をしたうえに、半年以上も動いていないのだから。

志保の言ったとおり、蘭がその役を担うのとすれば、かなり辛いこともあるだろう。相手は一切自分の事を覚えていなから自分と新一の思い出を全て封印しなければならない。話をしたところで逆に混乱して、病状の回復に悪影響を及ぼすだけかもしれない。

辛くないはずの無いことだ。

この日から蘭と新一の闘病生活が始まった。

＊＊＊＊＊

「でもなあ工藤君前と結局変わってへんやん。ホンマに、何考えてるんやろ」

結局、新一は新一だった。ということだろうか。新一は現在、結局記憶が戻ることは無かったが再び警察の要請があれば事件に身を投じている。本人の努力と身体・精神の回復力は相当なものであった。勿論、蘭の存在があってこそのものだが。

「ホーンと、どこで間違ったのかしら」

蘭はそう言いつつも穏やかな表情をしている。あのころの事が笑って過ごせるような今となっては貴重な体験と言えなくもないかもしれない。同時にやはりとても辛いことでもあり、出来ることならばもう二度と体験したくないことではあるが。

「平次も平次で全然変わってないし・・・って言うかアイツが工藤君を事件現場に連れて行ったりせんかったらなあ・・・」

「別に・・・時間の問題だったと思うけど・・・」

蘭は和葉が小声で言った文句に苦笑いしながら言った。

新一が普通の生活の戻れてしばらくたった後、何を思ったのか平次は新一を事件現場に連れて行った。その時新一は再び推理することに目覚めた。目覚めてしまった、と言ったほうがこの場合正確かもしれない。

「ごめんな・・・蘭ちゃん平次の所為で大変な思いばっかりさせて・・・」

――すまんな姉ちゃん。俺、ホンマは全部・・・知ってたんや・・・。

蘭が全てを知ってしばらくした後、平次は辛そうな表情で蘭に行った。新一は平次だけには全てを告げていたのだ。尤も新一のほうから切り出したのか、

平次が無理やり聞き
出したのかは定かではないが・・・。

蘭はそのことで平次を責めたりするようなしなかった。平次も自分
と同じように、いや
もしかしたら自分以上に辛かったかもしれない。そう考えると彼女
には責めることなど
出来るはずもなかった。大変だったのは寧ろ和葉だった。

当事者を除けば新一に対して一番怒っていたのも和葉なら、真実を
知ったときに「自分
は知らなかったとはいえなんて酷いことを言ってしまったのだろう」
と一番自分を責め
て泣いていたのも和葉で、その真実を蘭に黙っていた平次や志保に
対して一番怒ってい
たのもやはり和葉だった。それが彼女の性格であり、いい所といえ
ばそうなのだが。
そんなことがあって平次と和葉の仲はしばらくギクシャクしていた
が、しばらくすると
自然と元通りになり、二人が二十歳になるころには、めでたく幼馴
染を卒業した。めで
たくと言うか、やっとと言うか・・・。

「ううん・・・別にいいよ。服部君も辛かっただろうし・・・。それ
に、事件の事だっ
て・・・さっきも言ったけど、やっぱりそれが新一なんだから仕方
がないよ服部君は悪
くないよ」

「蘭ちゃんがそう言うんやったら・・・ええけど・・・」

和葉がまだ何か言いたそうにしていると、玄関の方で物音がした。
どうやら新一が帰っ
てきたようだ。それほど時間が掛からなかったことを考えると表現
が正しいかどうかは
分からないがそれほど難しい事件ではなかったようだ。

「お、ナイト様のお帰りやな♪じゃあ邪魔者は退散するわ」

和葉は蘭をからかう様に言った。尤も、どこか羨ましそうな表情も
していたが。

「まったくもお、そんなに事件が好きなわけ？」

帰ってきた新一に蘭は一応の文句は言うが、それほど本気ではない。
蘭もやっぱり、そん
な新一が好きなのだから

「しゃあねえだろ、目暮警部がどうしてもっていうから・・・」

新一が突発的に事件の依頼を受けて出掛けていった時は、大抵いつ
ものこのようなやり取
りなので面倒くさそうに返す。

「念のために言っとくけど、明日からしばらくはケイタイの電源切
っといてよね」

「バーロ。わーってるよ、いくら俺でも明日からは事件に巻き込ま

れたくないしな。まあ
目暮警部もさすがに遠慮するだろうし、てーかして欲しいけどな」

変わったこと、変わらないこと、変わってしまったもの、得たもの、
失ったもの・・・

新一が闇の世界を光で葬り去るべく戦いを挑んだあの日を境に、二
人には色々な紆余曲折
もあったが、結局は本来二人が歩んでいくはずであっただろう道、
戻るべき道に戻ること
が出来た。その事実があるだけで、二人には十分なのかもしれない。

翌日、前日までの空模様とは一変した、雲ひとつ無い青空が広がっ
ていた。それは二人の
新しい門出を祝っているかのようだった。

最終話（後書き）

和葉「何やのこれ？」
作者「小説ですが（汗）」
和葉「そんなん聞いてへんわ、最初の予定と全然展開違うやん！」
作者「ちょっと思うとところあって変えたんです（滝汗）」
和葉「よ言うわ！ウイルスに感染してＰＣ初期化したのはどこの誰やったかなあ？」
作者「うっ・・・」
和葉「それだけならまだしもバックアップ取るん忘れたアホは何処のどいつや？」
作者「・・・」
実話です（爆）

え～っと；まずは今まで読んでくださった皆さんありがとうございました。
話が進むごとに支離滅裂＆雑になってきて・・・
結局最初の構想からは随分と外れてしまいました。
そもそも新一の記憶が戻らないのはどうよ？て話ですよね（苦笑）
まあ予定通り（？）無理やり新蘭で終わらせることは出来たんですが・・・
志保さんも辛い役ばっかりになってしまいましたねえ。お前本当に好きなんか？と、思われた方、もいるかもしれませんね＾＾；

あと、新一が病室で蘭に何を言ったのか？
ご想像にお任せします（ぉぃ）
いや、一応自分の中では決まってはいるんですが、全体的にあえて曖昧なままにしておきました。

ではでは、今までこんな駄文を読んでくださった皆さん本当にありがとうございました。

和葉「恥かくだけやからもう投稿せんときや」

作者「・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0020a/

Ｍｉｓｓｉｎｇ

2010年10月10日13時01分発行